

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究（B）（1）、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

1 1 上山 和雄氏

うえやま かずお 國學院大學・文学部・教授 日時 : 1998年10月26日 出席者: 伊藤隆 伊藤光一 勝村哲也 梶田明宏 小池聖一 西川誠 矢野信幸 武田知己
--

伊藤 本日は上山さんからお話を伺います。上山さんのこれまでの研究と史料ということと、上山さんはいろいろ史料のことをおやりだそうでございますので、そのこともお話いただけるのではないかと思います。

上山 上山でございます。現在は国学院の文学部史学科に勤めております。

きょうは横浜の話と、その中で私が関わってきたことについて申し上げようと思いますが、まず横浜のことを2つに分けてお話し、3番の「首都圏形成史研究会」というのは、横浜での活動の副産物と自分では位置づけているんですが、そういったものを4年以上前に作ってやっておりますので、その件に関してもお話してみたいと考えております。

開港資料館の紹介・市史編集室の紹介はそこに書いてある通りです。昭和29年に最初の市史の編纂に着手されたと聞いておりますが、それが相当かかって1981年—昭和56年に、最終的に解散いたしました。それで市史が終了すると同時に開港資料館が開館するわけですが、最初は市史編纂の際に収集したものを基礎にして開港資料館を作るという計画でスタートしたわけです。時代としては、市史は昭和の恐慌時ぐらいまで踏み込んで昭和初年まで行っておりますが、館としては震災ぐらいまでを対象にしています。横浜開港資料館と言いましても、英文の名前は横浜アーカイブスとなっております、文書館という位置づけです。

その開港資料館の開館準備と並行して、昭和期以降の横浜市史を編集する準備が進んでいき、高村先生を編集委員長にして1985年に発足する。時代は前の市史が主にやったところのあと。具体的には昭和期ということになりますが、分野によっては震災後、あるいは恐慌後というような形で若干ぶらつきはありますけれども、そういったところを対象にして市史を編纂しようということで、当初は10年計画でしたが、他の市史等の例外にもれず若干の延長を重ねております。

これは数年前まではかなり動き始めていて、現在の市史で集めた材料というものを基礎にして、横浜にとっては3番目の歴史関係の博物館というのか、記念館とい

うのか資料館のようなものを作ることが具体化しつつあって、都市発展のようなものを作るつもりでした。私たちのほうも、市史を編纂すれば、それをもとにして何らかの施設を作ること前提に史料の収集等を行っております。現在は神奈川県財政の悪化がいろいろ報じられておりますが、横浜市も同じでございます、都市発展の博物館・記念館の構想というのは中断している状況です。景気が好転すればまた動き出すのではないかと期待はしていますが、非常に不透明な状況です。

伊藤 いつ終わるんですか。

上山 平成15、6年だと思います。2度目の延長で今度が最後だと言われておりますので、その間に景気が好転すればと思っておりますが、一旦はおおよその場所まで決めたんですけれども、ちょっとひどくなりましたね。

開港資料館と市史の編集室について、私は半分中で半分外という感じがあるんですが、外から見ていて感じる点というのは、共通するところがいくつかあります。これは横浜の町の特性なのか、近代に非常に限定するという事です。開港以降と申しますか、開港資料館も市史のほうも非常に新しいところで、これは横浜が全く新たに近代になってから作られた町であるから時代が限定されていることもあると思っておりますが、近代に重点を置いて予算を注ぎ込んでいくということをやってくれますので、そこで働いている人間も、一緒になってやっている人間もたいへんあり難い。よその人たちからすれば、非常に横浜のことをうらやましがられる。特に開港資料館、あるいは市史の編集室もそうかも分かりませんが、いままでは相当、史料収集費に対して潤沢な予算がつけられてきました。

伊藤 さっきのお話で3つ目とおっしゃいましたが。

上山 1番最初に作られたのが開港資料館で、2番目は緑区に横浜市歴史博物館というのがオープンして5、6年ぐらいです。これは典型的な博物館で教育委員会所属になっております。

伊藤 それは物なんですか。

上山 物で近世までを扱うという形です。特にあそこら辺は、建てたところが縄文の住居跡などが大量に出て、考古学的に関東のほうでは非常に著名な遺跡のようです。それで、当初は考古を中心にしたものを作るという計画だったんですが、それからいろんな絡みがあって、それでは開港資料館が扱っているところまでを対象にしようと。しかし、考古はそれでも大きいです。遺跡を含み込んだ野外展示施設もやっていて、近代の展示も一応やっておりますが、近代は人を置いておりません。

伊藤 近世文書なども持っているわけですか。

上山 集めてます。

伊藤 近世文書は当然、近代文書に引っ掛かってくるということですね。

上山 それで3つの施設の間で、たとえば、いい史料が古本屋などで出たりすると、

中で調整してやっているようですが、たまにはバッティングする。地方文書などにしましても最初のうちは、バッティングが起きて問題になったことがあったようですが、いまは横の連絡というのをそれぞれ取るようにして、その史料がどこら辺の時代が中心であるかによって、博物館に入れるか開港資料館に入れるか、あるいは市史に入れるかというので、共同してやっているようです。

伊藤 いまのは教育委員会とおっしゃいましたが、開港資料館は。

上山 総務局の中に入っております。

小池 公文書館はありませんでしたか。

上山 ないです。

小池 公文書館運動をされている方がいらっしゃいますが。

上山 藤沢ですか。

小池 藤沢も含めて横浜でも。

上山 高野さん。横浜は入れるような公文書がない。

小池 焼けてしまっていないですね（笑）。

上山 私たちは役所に対してどういう理由で史料を集めるかと言いますと、これは明確で、震災と戦災で壊滅的にやられてしまい、本当に横浜のことを知らせてくれるものは市内にはない。もちろん、かつての郡部のところに行けば農家とかいろいろなものの史料があるけれども、そういったものは本当の開港以降の横浜の都市化といったものを知らせてくれるものはない。だから、外国に行かなければならない。神戸に行かなければならない。群馬に行かなければならない。そういうところに行けば、横浜に出てきた人の家と横浜の商人との間の手紙のやり取りとか、横浜で失敗して引っ込んだ人たちというのは何人もいるわけですから、特に関東近辺——群馬とか山梨とか長野とかの史料調査をやらなければならぬ。そういうことを前面に出して、横浜に限定されない史料収集を心掛けてやる。

小池 市立図書館に今井清一さんの集められた史料がありましたが、あれはどうされたんですか。2・26関係のビラとか、その当時を含めた新聞とか雑誌とかがあったんですが。

上山 それは聞いてないですね。

小池 神奈川県博との関係はいまどうなんですか。

上山 あまり強い結びつきというのはないです。むしろ県の公文書館が、県関係のものは持っているということです。

小池 横浜との間で分合したりはしないんですか。

上山 人同士で何とか上手くやりあっていると。

小池 属人的というかね（笑）。

上山 まさに属人的ですね。市立図書館などから文書や図書を移管するということ

は、おそらく不可能だろうと組織的には思います。おそらく開港資料館でも複写史料で集めているとは思いますがね。

それからスタッフのほうですが、これは規模の相当大きい大学でも、1つの学部で近代関係をやっているのは1人か2人ぐらいいればいいぐらいですが、開港資料館というのは、マスター・ドクターを出た研究者が数人という規模でいる。それから横浜市史にも、常勤職という形で2、3名の専門職が、政治・経済・文化をそれぞれ担当しておりまして、その人たちが大学などに出ていけばまた新しく若い人になるのでいいんですが、なかなか大学という職はないですけれども、いままでだとある程度の回転をしてくれています。

実を言いますと私もいちばん最初、オーバードクターのときに、開港資料館の開館時の要員を頼みますということで、半年間ぐらいいだけ関わったんです。その半年間ぐらいいしか私はおりませんでしたが、たいへん刺激的でした。それはなぜかと言いましたら、かなり好きなことをさせていただけるという感じでしたね。

次に、どんな史料を持っているかということですが、実は大きな組織的な変更というものを開港資料館は迫られておりまして、いままでは総務局だったんですが、財団の数が多すぎるということで、開港資料館の財団と横浜歴史博物館の財団を10月1日に統合しました。それに合わせて開港資料館の紀要が——これは16号ですから、16年間の開港資料館の活動を総括的に振り返ったもので、その中に開港資料館がどのようなものを集めてきたのかがありましたので、それを右のほうに出しておきました。

それを見ていただければ分かると思いますが、横浜アーカイブスとなっていますが行政資料というのは非常に少ない。それらも職員録、統計書、市報といった類のものです。実は戦後のものはマイクロフィルムになって文書課が持っているんですが、そういったものは入れていません。

次に、政府資料、海外資料、近世・近代古文書、新聞・雑誌、横浜絵・写真集、個人コレクション、文献資料といった形で掲げておりますが、これはどちらかというと、すでにあるものをどう分類したのかという形になりますが、所蔵されるに至った過程によって見ていきますといくつかの種類があって、1つは市史の編纂過程で寄託とか寄贈等をうけて所蔵されてきたもの。これは市内の近世・近代の古文書が多いということです。もう1つは、開館するための準備、それから開館したあと購入したのも相当数にのぼる。横浜絵とか写真とか個人コレクションの類は相当量購入したものです。もちろん個人のほうから話があつて購入したり、オークションとか古本屋などに出たものを購入したりといろいろあります。

新聞のコピーをお配りしてありますが、ブルーム・コレクションという、欧米人の日本旅行記、滞在記、旅行案内、日本研究書、ビゴー画集、欧州版古地図等々と個人

コレクションのところに記載されておりますが、相当のものです。ブルームという人は横浜に昔から関連していて、戦後はC I Aの要員として活動したようです。それからドン・ブラウンだったと思うんですが、そういったコレクションがあります。もう1人面白いのは、戦前から関係はしているんですが、C I A絡みの人物のコレクションがあって、その中には文書がある程度含まれていて、戦後の占領期の状況、占領政策などには面白そうなものがあつたと記憶しております。もちろん、この他に日本人のものもあります。

市域外については、先ほど言いましたように、横浜というのはいろんな人たちが集まってできあがった町で、横浜で一旗揚げたあと故郷に引き籠もってしまった人たちが結構いるものですから、そういう人たちの史料を大量に集めました。

それから海外資料も相当集めまして、最近はあまり行っていませんが、開港資料館のスタッフが、アメリカ、イギリス、フランス、中国の4カ国から、主にアーカイブスの史料ですが、中国などにしましても、いくつかの档案館の横浜絡み、あるいは日本絡みの史料を集めたものです。ただアメリカに関しては、アメリカ人で横浜にお店を持っていた人の文書も若干入っております。

それからもう1つは、政府資料も複写して相当数集めています。マイクロフィルムの形、あるいはマイクロフィルムを焼き付けて収集しています。これは開港資料館が調査研究員という体制になっておりますので、調査研究に必要な史料ということで、生の史料ではありませんが、開港資料館の業務、調査研究員の調査研究活動にとって必要な史料ということで、政府関係の文書とか、国会図書館・憲政資料室、あるいはそれ以外のところに収められているようなものを相当数マイクロで収集しています。

このような史料や新聞・雑誌等、閲覧に供する普及活動がありますから、非常に見やすい形で提供しています。大学などの場合、マイクロフィルムで買ったならマイクロフィルムですっと見なければなりませんけれども、開港資料館は、主要な新聞というのはほぼ焼き付けたものを見せてくれるものですから、たいへん便利ということになろうかと思えます。

私は資料館にそのあとも関係していたものですから、長野県・群馬県の史料調査・収集に同行したものがいくつかあります。その中で私が鮮明に覚えていますのは、長野県小諸の小山邦太郎という、戦前は衆議院議員で戦後は参議院議員になって、もう死んで10数年になろうかと思えますけれども、蔵を開けていただいたらすごい史料がありました。

もう1つは群馬県の大間々ですが、吉村屋幸兵衛という、幕末から明治10年代にかけて横浜で3番目から4番目ぐらいのかなり大きな生糸商になるんですけれども、それが破綻して完全に大間々に引きあげる。その幕末から明治期にかけての本家と

の手紙のやり取り、それから横浜に出ていった弟との間での膨大なやり取り。

もう1つは、長野県の飯田に原家というのがあるんですが、そこも幕末から明治のはじめにかけて横浜に出て行って商売をやる。それは失敗するんですが、失敗したとしてもそういったところは、田舎に帰るとそれぞれの地域ではトップクラスの名望家ですから、そのまま残されている。

それで一般的な史料の収集のやり方は、量が多ければ日通のトラックを頼んで、日通に同乗して行く場合もあれば別行動をする場合もありますが、そのトラックで史料を横浜まで運びこんで、何ヵ月間か時間をかけて完全に整理する。それで主要なものはマイクロフィルムに撮影して、また今度はトラックで返却する。市域内のもは寄託とか寄贈ということを依頼しているようですけども、市域外の場合は基本的には現物は集めていません。私は自分の専門に絡んだところしかやっておりませんので、それ以外のことというのは直接的には知りませんが、大規模な形で史料は集めています。

伊藤 小山邦太郎のは、その後どうなったかというのは分かりますか。

上山 いまも醤油醸造で奥さんなんかだと多分知ってらっしゃる、味噌では結構大きいですね。

伊藤 いまでもその史料はそこにあるということのようですね。

上山 ええ。

伊藤(光) 目録はもう全部できたんですか。

上山 やってます。刊行といいますか、これぐらいの冊子になってます。

伊藤 それは横浜関係だけということではなくてですね。

上山 面白いものは基本的にありました。ただ、政治はなかったですね。

伊藤 借りてこなかったんじゃないですか。

上山 いえ。あそこは一時、本当に潰れるかというところまで行きましたので、邦太郎の息子さんというのは絶対に政治には関わらないと。ただ、戦後の選挙の史料というのは若干あったように記憶しています。

市内の政治家については、市史のほうで私もあまりちゃんとチェックはしていませんが、あまり有名な政治家というのはそういません。県知事、市長、それに中村房次郎の書簡がいちばん新しいですね。一昨年ぐらいに数百点出まして、その整理をいまやっているところだろうと思います。中村の手紙の中に、彼はかなり長生きしていますので、昭和期までいろんな人の手紙が入っているようです。それから、赤尾彦作の手紙もありますし、内山岩太郎とか、これは官選知事から民選知事と両方やった人です。内山のは、結果的には市史のほうにいま入れていると思います。そういう政治家絡みのものは、横浜あるいは神奈川県に関係するような人ですね。もっとレベルの下の市会議員とか、名前を何と行ったか忘れましたが、この前、比

較的面白い史料が市史のほうで出たんですが、共産党の国分何とかという県議員までやった人で、1945、6年ぐらいから労働争議日誌をきちっと付けていて、それが出たりはしております。

次に開港資料館の活動ということですが、調査研究と普及というのはどこの館でもやっていることですが、調査研究と関わり合わせて特色があると思うのは、委託研究会というものを作っております、これは現在は3つです。いちばん最初は横浜近代史研究会1つだけだったんですが、近世史のほうを作って、近代史研究会、対外関係史研究会の3つを作っています。これは中の人たちがいかに外と結びつかかということを考えておまして、資料館だけにいたのでは狭くなってしまうので、どこかを通じて研究会といったものをつながっていくとか、外の研究者とのつながりの拡大を求めることがいちばんの目的です。それと委託研究会という形にすれば比較的、それを理由にして中の研究者もある程度、役人の制限というものを越えてできるようなところがある。その2つの理由から委託研究会というものを作っていると私は理解しております。

どうしてもこれも属人的な形になってしまうんですけども（笑）、近世史は大口先生。近代史は現在は私がやっています。それから、対外関係史は石塚先生がやっています。それぞれの委託研究会の代表者の限界を越えられない嫌いはありますが、年に数回の研究会を開いて、内部の報告と、外の方をお願いして1時間半から2時間ぐらいの研究会を行うこと。これが定例的な活動です。それからもう1つは、近代史研究会という名前でさまざまな史料調査も行いますし、出版もやっております。近代史のほうはいままで小さなものも含めて3冊ほど出しております。

市史のほうですが、これは昭和期を対象にしている、政治家の史料や、新しいところになるものですから商人の史料は殆どなく、企業ですね。横浜に所在している日本鋼管とかキリンとか東芝とか日産とか、そういう大手の企業の史料を相当数、殆どマイクロフィルムで収集しております。

それから地方文書は、これは当然入ってくる。ユニークなところでは、塙という神奈川県の小作官の史料が分かりまして、これは栃木県のほうに退職して引き込んだ方ですけども、その史料をマイクロフィルムで大量に収集しております。これは全国でもおそらく例がない。大正期のいちばん最初ぐらいから戦時期までです。戦争中に栃木県に引き込んだと記憶しております。神奈川県内に関してはほぼカバーしていますので、それぞれの地域の小作農民の状況というのが非常に克明に記してあるものです。

市史編集室は将来の施設を念頭に史料収集も行うというのが片方にありますから、編集のために断片的に史料を集めるというのではなく、長期保存に耐える方法で史

料を集める。それから断片的な形ではなくて、できるだけまとまったものはまとまった形で集める。それから、開港資料館の場合もそうですが、将来的には閲覧させるかも分からない。また、三井文庫とか法務省とか商工省の図書館とか、あるいは農総研のようなところの史料も相当数集めております。

現在の市史では海外史料も相当集めております。これも結果的に属人的な形になってしまいうんですけれども、海外の史料を相当集めたというのは、荒敬（占領期の研究者）さんと、おそらく私だろうと思うんですが、荒さんは第八軍の史料を中心に集めています。私はあまりよく分かりませんが、彼は横浜だけではなくてその他のところからも派遣されて、たいへんな場合には1年間のうち2回ぐらい行って、ほぼアメリカのナショナルアーカイブスに籠もりきりといったような状況で史料をずっと見て、彼の場合は主にコピーで集められました。

私は横浜から2、3度行ったんですが、それ以外に、数年前になりますけれども、1年間完全に暇ができたものですから、メリーランド州立大学に1年間籍を置かせていただいて、収集費は横浜からという形で、私の場合は相当数をマイクロフィルムで収集しました。それで、私がどんな史料を集めてきたかというのは、戦前の1920年代から30年代ぐらいにかけての商務省の史料です。当時のアメリカが日本の経済力をどう見ていたのかとか、現実に戦後の経済摩擦の始まりは30年代にあるものですから、そういったようなところを主に集めています。

それからもう1つは、資産凍結でもって、お金や不動産だけではなく、アメリカに当時あった殆ど銀行と商社なんですが、そのドキュメンツが全部押収されて、殆どが価値がないんですけれども、ウォードパートメントが分析したのは物産と商事と大倉商事。この3社のドキュメンツはワシントンかニューヨークの1カ所に集めまして、特に機械部関係の資料を集めて、アメリカからどんな機械を購入したのか、その購入した機械が日本のどこの工場に納められているか、どれぐらい機能しているかというような調査をしているんですが、おそらく戦争のために使われたのはそれだけだろうと思います。それ以外は倉庫にずっと眠っていて、戦後になってから一旦、それぞれの企業に引き取るかという打診があったんですが、引き取ったところは殆どがそのまま廃棄してしまった。「そんなの要りません」と言ったところが、そのまま残ったというような状況です。

いま残っているのは、銀行では横浜正金が大部分。その他の銀行の史料も若干ありますが殆ど見るべきものはない。横浜正金は、明治13年にいちばん最初に駐在員を派遣していますが、それから22、3年ぐらいまできちっと史料があって、日露戦争の頃の史料があって、大正期の史料があって、若干飛び飛びですが、かなり残っております。昭和期になると、昭和の2、3年ぐらいから相当量の史料が残っております。これはニューヨーク支店の史料です。

それから物産と商事は、なぜかニューヨーク支店だけ史料がなくて、サンフランシスコとシアトル、ロサンゼルスといったようなところの史料が膨大に残っている。それぞれボックスにして、アメリカの文書ボックスでは物産がいちばん多いようで、2、3000 あるようですね。正金がいちばん少なくて 1000 ちょっとぐらいでしょうかね。それ以外にも小さな商社で面白いのがあって、たとえば、堀越とか、そういうのが若干あります。これは大量に抱えていて、そのうち何とかしたいと思っています。

伊藤 それはどこが持っているんですか。在米日系企業の史料は商務省が持っているわけですか。

上山 ナショナルアーカイブスです。ですから、アメリカに行けば見られるということです。

伊藤 アメリカで非公開になっているわけではないですね。

上山 はい。商務省の史料ももちろんそうですし、LCが所蔵している押収図書も、いまはもうLCの書庫の中に入れていただくということは不可能になってしまったんですが、私がいるときは自由に入れさせてくれまして、南洋関係の史料が若干残っていたり、内務省の検閲関係の雑誌とか刊行物といったようなものも大量にあって、それらを自由に見させていただいて、向こうで全くカタログされていないものがまだ大量にあるんですが、そういったようなものを見つuroって、かなりマイクロフィルムで持って帰っています。

伊藤 これは図書なんですか。

上山 図書と雑誌ですね。

伊藤 文書の類ではないわけですね。

上山 文書の類は、陸軍省のは田中さんが何かこれぐらいのものを出しましたね。あれがいちばん大きいです。それ以外は断片的です。ただ1つあるのは、ゲージというんですが、私たちは書庫の中に自由にに入れていただいたんですけども、それでも入れないところがあって、その中に入れているみたいです。おそらくドキュメンツだと思います。

伊藤 それはどこから押収したかということは分かりませんか。

上山 所蔵印がありますから、日本のどこの研究所にあったか、機関にあったのかは大体分かります。

伊藤 あなたがご覧になった部分ではどうですか。

上山 内務省、日本国内にあった植民地関係の機関ですね。それから、ドキュメンツがたまに紛れ込んでいるんですが、そういったものだと明らかに南洋。米軍が占領と同時に持ちかえったドキュメンツの類といったようなもの。それから、なぜか気象台というのがかなり入っているんです。特に残っているのを見て感じた印象と

いうのは、韓国と台湾に関するものは少なく、日本が戦争中に占領したところとか非合法というのか、満州とか中国とか南方とかに関する書籍・文書は多かったですね。

伊藤 必ずしも図書だけというわけではなくて文書もあるわけですね。

上山 文書もあります。

伊藤 それは登録されているようなものなんですか。

上山 いえ、登録されてないです。多くはもう返されたんですね。

伊藤 返還文書ですね。

上山 返されてないものが残っていると。それで、おそらくもっと入れないところに置いているものがあると思います。

伊藤 こっちから返還要求をする主体のないようなところもあるわけでしょう。

上山 はい。研究所とか満鉄の図書室とか、そういったところの判子がボンボン押してあるやつがありますね。そういったようなものは、丹念に日本の国内で見ればどこかにあるというのがかなりありますけれども、本当に日本の国内でないようなものというのは、たとえば、国会図書館の方が、検閲の雑誌といったようなものを丹念に調べられて、所蔵されているものをリストアップされております。

伊藤 封鎖機関になったものは持っていったんだろうと思うんです。満鉄調査部の東京のとか、大蔵公望の大蔵研究室なんていうのは全部持っていったんだと思います。後継団体がいないものは返還要求もできないでしょうから、占領して取ったら勝ちだということですね。

上山 それから在日米国領事館資料は意外でして、やはりアメリカはすごいなと感じたんですが、震災で領事館が焼けてしまうんですけども、震災直後から横浜領事館の史料というのが、領事館が閉鎖するまできちっと残っております。

伊藤 これはナショナルアーカイブスですか。

上山 そうです。これは国務省関係の資料の中の1つの分野ですね。

その次は戦争中のものですが、エア・ターゲットと言いまして、コピーをお配りしていると思いますが、それは、北区の軍事施設の集積地、いまの王子近辺でしょうか。これが全部で12巻、LCの議会図書館の地図関係のところにあるんですが、45年にかけての空中撮影ですね。それが樺太から中国まで全部載っております、44年、45年段階で米国が日本の戦略爆撃の対象と考えているところです。

伊藤 工場や何か。

上山 工場とか燃料タンク、港湾施設といったようなものですね。これをどういう形で収集しようかと考えまして、空中写真なものですから、ワンショット撮影するのに30ドルぐらいで、それが12巻ある。これはやりきれんと思って16ミリのフィルムで全部撮影したんです。それで焼き付けてもらったんですが、やっぱり駄目で

したね。しかし、字の情報はきちっと写ってます。

伊藤 もとは非常に鮮明なんですか。

上山 かなり鮮明です。順番に1つの地域を何段階かに分けて引き延ばしたんでしょうか、1つ1つは小さいのを拡大したもの。その中にもありますが、オイルタンクとか船の形なんか鮮明に出ていますからね。

伊藤 もちろん横浜を中心に撮られたんでしょう。

上山 いえ、日本全国です。

もう1つ書いてあるポーレイ・ミッションについては、目録を見ますと工場に関するデータはかなりあるようで、全国に渡る海軍管理工場のリストとあって、全国にいくつぐらいありましたかね。それで、戦争中にどれぐらい何を作っていたのか、敗戦の直前に何を月産どのぐらい作っていたのか、機械の設備がどのぐらいあったのか、爆撃によってどれだけの打撃を受けたのか、プラントごとのデータなどがあったものですから、そういったようなものも撮ってきています。

伊藤 それは全国的にですか。

上山 これもそうです。

伊藤 その中に随分、横浜も含まれているわけですね。

上山 そうです。

伊藤 ポーレイ・ミッションの報告書として一括してまとまっているんですか。

上山 全部で5、60箱あるんですかね。それで、目録を見て私が非常に期待したのは何かといたら、工場ごとの簿冊みたいなものがあるんです。しかし、向こうに行って実際に見てみると、機械のインベントリーといいましょうか、旋盤が何インチとかそういうものが半分ぐらい占めておりましてがっかりしたんです。

でも、いくつかは面白いのがありました。面白かったのは、ポーレイ・ミッションで結構有名な東洋学者などが来ておりますが、そういった人たちのオフィシャルなダイアリーが残っております。いちばん私が面白かったのは、たとえば、志賀義雄を呼んで戦後に共産党の活動に関していろいろ議論しあったとか、あるいは林百郎とか、風早とか、そういう人たちをいっぱい集めて、日本の再建に関してどういうことを考えているのかというようなことを議論してる。

伊藤 ポーレイ・ミッションとしての正式の報告もあるわけですね。

上山 ええ。

伊藤 これは全部LCですね。

上山 ポーレイはアーカイブス、エア・ターゲットはLCです。その上はアーカイブス、それからLC。上の2つはアーカイブスです。

プランゲも面白かったですが、プランゲも村上さんという方が日本人でずっといらしてたんですけども、その人ともいろいろ話をして、横浜がいちばん最初にプラ

ングを体系的に少なくとも神奈川県分だけはやろうとして、それを梃子にして村上さんが向こうで頑張っていて、向こうの大学も責任者を据えてやり始めたという感じですが。今度は早稲田に行きますが。

それで、私が関わっているのは横浜だけではありません。自分の住んでいる町とか、自分の住んでいる町の隣——野田の市史の編纂とか。国学院というのは卒業生に中堅公務員のような人たちが結構いまして、教育委員会とかそういうようなところにいるものですから、そういうところから頼まれたりして役所の仕事を横浜以外にもやったりするんです。そういう中で、博物館とか市史の編纂室とか県史とか文書館とか、あるいは教育委員会などに行っている人たちとのつながりというのがずっと広まってきてます。それで、いろんな研究会とか学会というのはあるんですが、ちゃんと勉強するようなどころとか、しかも近代だけ、近代では地方史研究・地域研究のところというのは、なかなかやる人たちがいない。しかし、自分たちは地域研究というものをメインに据えてやらざるを得ない。それで、近代で地域研究をやっている人間の横のつながり、場が欲しいというのが特に30代の人たちの間に強くあって、だったらということで首都圏形成史研究会を作って、もう5年目に入っています。

最初は2、30人で、数年で何か仕事をやってつぶそうと思っていたんですが、思った以上に増えて170、80人になりましたので、これはもう簡単につぶせなくなりました。入っているのは大学の教師はあまり数は多くなくて、30代の地方自治体などで働いている人たちや、大学院生もある程度います。それで、例会を大体2ヵ月に1回ぐらい開いています。

それから小研究会も持っておりまして、ここでも1度話されたことのある櫻井さんも有力なメンバーで、櫻井さんなどを中心にして日露戦争前後の政治の研究会を1つ。それからもう1つは首都圏の流通と、もう1つは軍隊と地域といいまして、私が中心になって、軍事基地を抱えた地域で軍隊と人々はどのように日常的な交わりを持っていたのか。地域にとっての軍隊というのは一体何だったのか。1年ごとに、3、4年でそれぞれの研究会をつぶして、また1つ研究会を立ち上げるというような計画です。もうすぐ政治のほうは本になって、それがつぶれれば今度は都市計画の研究会を企画しています。実はきょうの6時からその立ち上げがあります。

それは、自治体などで活動している30代、40代の学芸員の人たちにとっての情報交換と、それから愚痴の言い合いをするときもありますけれども、それだけではなくて、きちっとした研究をできるだけやりたいという、その2つを考えてやっております。これも実は、連絡先として開港資料館が業務として位置づけてくれておりますのでやれております。

非常に散漫で何を言ったのか分かりませんが、私が見ている範囲での横浜の史料

状況です。

伊藤 どうもありがとうございました。どうぞ皆さんからご自由に質問をしてください。

ちょっと話は違いますが、ご自分の研究でお使いになった資料館、あるいはいろんな施設とかそういうのはどうですか。

上山 資料館の立場と利用者の立場は矛盾するというのが私なんかはありまして、これはプランゲの場合ですけれども、村上さんという人から私はいろいろ相談されました。そういう史料をきちっとしたい人たちにとってみると、研究者というのは非常にわがままであるというような問題を強く持っていらっしやる。これはおっしゃる通りで、プランゲコレクションなどは非常に紙質が悪くて、ちょっと触ればポロポロいってしまいます。そういうものを研究者というのは、自分の見たいところ見たいところと、悪くなるのを躊躇せずに見てしまう。アメリカは一般的にそれをさせるというか、アーカイブスなんていうのは、日本の資料館の人たちから見ればびっくりするような乱雑な史料の扱い方です。だから、アメリカのようなやり方がいいのか、日本のように資料館がきちっと管理するようなやり方がいいのか、私なんかは分からないという感じですね（笑）。

伊藤 農業総研の資料云々とおっしゃいましたが、農業総研というのはどうですか。

上山 かなり自由に見せてくれます。

伊藤 目録なども完備しているわけですか。

上山 あれは完備とは言えないんじゃないですか。本に関してはきちっとしていると思いますが、現物史料を相当持っていますので、あれほどの辺まで完備しているのか。

伊藤 見るときはどうすればいいんですか。

上山 あそこを見る人はあまりいないんじゃないですか。見に行けば、歓迎とまではいきませんが、時期によって違うと思うんですけども、私は書庫の中に入れてさせていただいてチェックして、複写したり写真を撮ってきたりしました。

伊藤 分類などはちゃんとできているわけですか。

上山 大体、分野ごとにまとまっていますね。

伊藤 あそこは関係者の個人文書はないんですか。

上山 ありますね。

伊藤 それは整理されているんですか。

上山 リストに載っているのかどうか、ちょっと私は知りません。

伊藤 中に入れば分かるということですか。

上山 はい。

伊藤 これは1度調査させてもらわないといけないでしょうね。あそこも人間がた

くさんいて、どんどん収蔵してというわけではないですからね。

あとご覧になった史料の所蔵機関といますか、さっき農業総研の他にいくつかおっしゃいましたが。

上山 通産省の図書館なんかはいいものを持っているんですけどね。

小池 商工行政史を作ったときに目録を作りましたが、あれ以外でもあるんですか。

上山 あるでしょう。

伊藤 オープンになってますか。

上山 人というか時期によって変わるんでしょうか。あるいは、紹介者というんでしょうかね。私も1度は中に入れていただいて「ああ、あるな」と思ったんですけど、2度目は自分1人で電話したら、「公開しておりません」と言われました。

伊藤 大蔵省の財政史室などはお使いになりますか。

上山 大学院の頃は行きましたが、最近は全然使ってません。

小池 あそこも史料の宝庫ですよ。入らせてもらったことがあるんですが、愛知揆一もあるし、賀屋興宣もあるし、それから青木一男もあるし。製本されてダーツと並んでるんですよ。

上山 占領中のものだって相当あるんでしょう。

小池 あります。

伊藤 あれは非常にガードが固くて、僕も表紙だけ見せてもらって、それ以上のことは駄目ですね。

小池 でも、いまいちばん通産省がガードが固いんじゃないですか。僕は外務省のときに史料収集でお願いしたことがあるんですけど、ガードは固かったですよ。大蔵省も結構すんなり見せてくれましたけど、ガードは固かったですね。それから、配置替えというか、中で結構、編成室のあれが流浪している感じがするんですよ。だから、どうしてもガードが固くなるのかなと。

上山 文書館というか所蔵機関との関係で言いますと、特定の人にはよだれを垂らしそうな史料を持っている。ところが中の人間にすれば、これは大事に取っておきなさいという史料があって(笑)、たまにぶつかりますね。だから、全国的に知られているような機関ではなくて、地の利と言いましょか、そういったようなことで入っている史料があって、これは奥さんが付けていた日記だったんですが、結構著名な政治家でしたが、やっぱりオープンにはしませんね。

伊藤 日記の場合はいちばん難しいですね。野田なんかはどうですか、醤油関係とか。

上山 出しませんね。「醤油が出なければ、なかなか市史は出ないよ」というようなことを言っているんですが。

伊藤 企業の史料はなかなか難しいですか。

上山 いま言いましたいくつかの史料というのは、社史の編纂の際にある程度整理してそのまま残されているというところは、快く見せてくれるところが比較的多いですね。しかし、個人が行くと対応しきれないというふうに言われるのが多いですね。役所などを通じてやると比較的、閲覧させてくれし、複写もさせてくれるという感じです。

伊藤 三井文庫はありますが、三菱はどうですか。

上山 三菱ができたのが2年ぐらいになります、最初のうちは全然駄目で、私もすぐ行ったんですが、向こうの判断で出せる史料と、それから所有権が曖昧な史料がありまして、たとえば、営業報告書1つとか、三菱商事が比較的最小限に配ったような調査報告書の類にしても、三菱商事が出したということが明確であれば、見せることはできるけれども複写は駄目だということです。もとの商事に行って聞いてこいというような態度だったんですね。それが去年ぐらいから大幅に変わったと聞いてます。

伊藤 僕は不勉強で知らないんですが、それは何という機関ですか。

上山 正式な名称は忘れちゃったけれども、三菱経済研究所の史料がもとになってます。

伊藤 住友はどうですか。

上山 住友は噂は聞きますが、私も直接には行ったことがありません。

伊藤 どんな噂ですか。

上山 部外者には公開していないらしいですね。

伊藤 横浜正金はどうなったんですか。

上山 横浜正金の史料というのは本になったやつですね。あれはまだ眠ったままだと思いますが、研究材料に使われた以降どうなったかというのは聞いていません。

伊藤 横浜正金は世界中に支店網があつて情報収集をやったわけですから当然、横浜市史としては注目されておやりになっていると思ったんですが。

上山 横浜正金の史料を部分的には横浜市史がいただいております。昭和期の史料ですが、どこの支店の史料でしたかね。

伊藤 支店の史料ですか。

上山 支店といってもどこかにあつた史料です。それを向こうのほうが、要らないから要るのであればという形でいただいたんです。お金の回転といったようなものに関する、いくつか面白いものはあつたと聞いております。

小池 横浜正金の建物は空襲に遇ってませんから、書庫の中にはたくさんあつたんじゃないかなとは思いますが。それで、あそこの上物を使った博物館があつて、昔1回入ったことがあるんですけど、書類はたくさんあつた記憶があります。

伊藤 いまそこにあるわけじゃないでしょう。

小池 結構ありましたよ。この部屋いっぱいぐらいあったような気がしましたがね。地下の大金庫の中にあったように思いますが。

上山 そんな昔ではないでしょう。

小池 僕が高校生のときですから20年近く前ですか。

伊藤 上山さんはいま、いちばん研究の中心にしておられるのは何ですか。

上山 アーカイブから集めてきた資料を、どういうふうに日の目を見させるかということですね(笑)。ぼちぼちは使っているんですが、ちゃんとやらなければいかんと思ってます。

伊藤 でも、もともとの研究とはあまり密接にはつながらないんじゃないですか。

上山 叱られてます。(笑)

伊藤 高村先生ですか(笑)。

上山 生糸関係というのは物産なんかは非常に大きいし、商事にしましても大きいですね。

それからいま関心を持っているのは、LCから持ってきた図書類とか、若干ドキュメンツめいたものというか、向こうの日本人会が出していたような新聞とか週報みたいなものも入っていたり、そういったものでそういうようなところもやりたいと思ってます。だから最近是比较的、もちろん長野とか地方というものもやっているんですけども、物産とか商事とか南方とか、そういうのをやりたいと考えてます。

小池 南方のほうというのは、具体的にどんな史料があるんですか。

上山 きちっと調べれば日本の国内でもあるような史料が相当あると思うんですが、たとえば、華南銀行の調査史料が相当数あるとか、それからジャワの日本人会のものですね。それと関係があるんですが、私が取ってきた正金関係の史料というのは、正金内部のお金の回転とか、これは私などではついていけませんので、そういうようなところは殆ど関心がなくて、それぞれの支店の調査報告です。これは相当数ありまして、中国、南方、それがニューヨークのほうに全部行っているんですね。それを集めてるので、そういう生の史料で、30年代、20年代以降の日本人の外国における活動というような感じでやりたいと思っています。

小池 外務省の史料を整理しまして、そのときに公開をさせてもらえたものがあつたんですが、それは南発券をやる要因とか、あの関係ですよね。南発への預金高がバーッと書いてあるんです。ところが、預金のリストというのは対日協力者のリストとほぼイコールになりますから、これは出すのはまかりならんということになって出せなかったものが結構あります。簿冊で7冊ぐらいありました。それと、戦後にそれを整理するにあたって外務省から訓令が出るんですよ。それもまた、まかりならんということを出せませんでした。

伊藤 森戸の文書はどうして横浜と関係あるんですか。

小池 全然関係ないですよ。お従兄弟さんが横浜在住で開港資料館に寄贈されて、開港資料館では後回しにされていて、それで横浜市史に回ったという感じです。それで、前田さんというのが教育史の先生ですから関心を持たれていて、あれは科研を取って整理をして、それで僕の森戸文書研究会にいるハタ先生も教育史ですから、一緒に組んでというような形で進んでいたんです。同じ森戸でもワンセクションという形で分けて、同じ文書々々でも分けて入ったんです。要するに、国立教育研究所の渡辺先生というのが、勝手に抽出をして悪く言うと。それで、中教審だけを大教センターに置いていたんです。だから、いま大教センターの所蔵で、そのうち一緒にしなきゃいけないんですけど。それでハタ先生は大教センターですから、問題箇所もおありでしょうからそこを中心にせめてくださいと。そしたらブンコウ関係があるところは分かりますから、前田さんとハタさんとで組んでという形になります。

それでマイクロ出版するというのも、先ほどお話をされたように横浜市史は公開機関ではないですから、出すのはいいけど私的な機関に出すのはまずいというようなことがあって、閣議会議は広島大学が全部持っているわけですから、それを一発出して商売でやっているんじゃないことを見せてから、2段目として横浜市史とやろうとしているんです。ただ問題なのは、横浜市史といっても横浜市史が主体ではないわけで、前田さんだということがあるし、それから編集権と所蔵権の問題が絡んでいて、広島大学の分は多分クリアできるんですが、そちらのほうでクリアできるかなという状況なんです。

整理の仕方もルールを決めてしたんですけど、やっぱり一緒にしないと意味がないわけで、一緒にして整理しているものですから、その整理のやり方がちょっと問題は問題なんです。ですから、広島大学所蔵のものど……

伊藤 それは市史の所蔵になっているわけですね。

小池 4分の1ぐらいは市史の所蔵という形になっています。

伊藤 市史編纂にはあまり役に立たない。

小池 間違いなく役に立ちません。それで僕も何回か行って、広島大学時期のものは僕が整理したんです。

上山 そういふのはいちばん最後に回される。

小池 回されるでしょうね。ただ、所蔵の問題に関すると、本当は一緒にするといちばんいいんですが、かといって都市発展とかいう形になったら横浜にとっても目玉になるでしょうね。ただ、遺族は知らないですよ。森戸の遺族は非常に怒ってますよ。「何であんな従兄弟のモリマツのやつが私に知らせずにこんなところに寄贈したんだ！」とか言って、この間会ったとき怒ってましたけど、「まあ、そうは

言っても向こうで整理していただいているんですから」とお話ししておいたんですけど。ただ、あり方としてはあまりよくないあり方です。だから、目録なんかでもきっちり公開をすればいいんですけど。

伊藤 そういう横浜市史の編纂と直接関係のない史料も少しは入っているわけですか。

上山 どころ辺まで関係ないかっていうのがね。森戸がいちばん関係ないかも知れないね(笑)。ちょっとかすっているとか、そういうのはいくつかあります。

小池 でも、シグナービルってすごい綺麗なビルで、ワンフロア殆ど貸切り状態ですから、非常に恵まれているなと思います。だから、そういうところで少なくとも、森戸に関しては何とかちゃんとした形で広島大学で1回出して、そこから横浜ともう1度仕切り直しをしてご了解いただいととは思いますが、横浜市史のほうとしますと、前田さんが市史の編集委員であって、森戸なんか関係ないじゃないかという意見が強いのは無理なからずとは思うので、そのときにはしかるべき形で、事務局サイドでは話がついたんですが、上のルートで大学長から交渉に行って、市長宛にということには大体手筈は殆ど僕のほうでは整えてあるんです。あとは今度、高村先生でもお手紙をして、ご了解をいただかなければいけないなとは思っているんです。

あそこにある横浜正金の資料は平さんが整理されているんですか。

上山 編集室ね。それは私が大分取ってきたものです。

小池 そうですか。バーツと綺麗に並んでいるなと思って、報告書も全部揃っているし、収支決算書以外はバーツと並んでいるものですから、すごいなと思ってたんです。

上山 正金の生のものはどこかの倉庫に入っている。あそこにあるのは、アメリカから取ってきたものなんですね。

小池 コピー版みたいな形で製本されているものですよ。他にどのぐらい所蔵庫に貯めこまれているんですか。

上山 結構あると思いますよ。しかし、オリジナルな史料はあまりないかも知れないですね。

小池 市の公文書類というのは市史のほうで、いわゆる非現有記録というのは預かってたりしてないんですか。

上山 それはやってないです。本庁に文書課が倉庫を持っているのかな。そこで必要なものというのは見るという感じで、ただ、あまりそっちは持ってないですね。

小池 コピーもとらせてくれないんですか。

上山 いえ、そんなことないでしょう。

梶田 開港資料館の紀要は見たことがあるんですけど、市史のほうで活字にしたも

のでは、どういうものがあるんですか。

上山 市史研究というのを出しておまして、10何冊出ていると思います。そこで、おおよその収集状況のようなことは……

梶田 具体的にどういうものを集めているかということまでですか。

上山 はい。

小池 刊行はまだ戦前でしたか。昭和の1巻が出て、2巻目が……

上山 2巻の上がやっと原稿を出し終わったんじゃないですか。それで3巻も上下ですね。

小池 都市発展記念館はどこへ予定されていたんですか。

上山 予定は港の見えるが丘公園、外人墓地の近くに作る予定だったんです。

小池 産業博物館と一緒にですか。

上山 というような案もあったんです。

伊藤 それは市有地があるわけですか。

上山 土地はないことはないんじゃないですか。

小池 市の財政はいま破綻状況ですよ。

上山 状況が変わらないと動きようがないでしょうね。

西川 有吉忠一の文書は市史研究なんでしたっけ。

上山 結果的には両方ジョイントみたいな感じで、現物は開港資料館です。

伊藤 あまり大したものはありませんでしたよ。

西川 書簡が大分あったような記憶があるんですが。

上山 書簡も比較的、断片的な、きちっとした形で残っているのではなくて、非常に苦労しているという印象があります。だから、まだちゃんと整理し終わってないんじゃないですか。

西川 史料は大体、ローラー作戦で一応集めた。それは、さっきの市史研究とかを見れば所蔵されているのは見えてくると。

上山 そうですね。

小池 粗目録ですから、何々関係で何点々々という感じですよ。

伊藤 とにかく開港資料館でもオリジナル史料というのは少ないですよ。やっぱり震災と戦災で大分あそこは亡失したんじゃないでしょうかね。

上山 本当に地方文書ぐらいですかね。

小池 藤沢のほうで文書館を作るという話がありますから、あそこまた分合したりするんじゃないですか。地方文書なんかで取り合いになったりすることはないんですか。

上山 そんなことはないんじゃないですか。

小池 あそこら辺は地方史の編纂が非常に盛んで、茅ヶ崎とかですね。

伊藤 そうですね。まあ、東海道筋は大体そうですよ。

小池 非常にメンバーもいいし。

伊藤 ただ、いずれのところも市の財政が逼迫しているから、なかなかたいへんです。バブルの時代みたいに史料がうんと高いとかいうことではないから少しはいいんだらうけれども、いっぺん上がったものはなかなか下がらないという原則ですからね。

県内のいろんな市史編纂や何かとは連携はあるんですか。

上山 私たちのレベルではありませんが……

伊藤 協議会みたいなものはあるんですか。

上山 もちろんあります。

伊藤 それは県のレベルでですか。

上山 県のレベルであります。それから、常勤嘱託とか専任の専門職の人たちというのは、そのレベルでもって横のつながりというのはちゃんと持っているようですね。

伊藤 僕らの研究グループでいま、史料所在の調査や何かをやっているんですけど、見ているとホームページを持っているところは本当に少ないですね。持っていても、何を所蔵しているかというのが入ってないところが非常に多いです。ですから、アプローチしても結局、閲覧の時間とか場所とか、そういのが書いてあるだけなんです。この間、鹿児島島の黎明館に行ったんですが、あそこも目録が全部打ち込まれていて、ホームページにつなげばすぐ目録まで公開できるというところに来ているんですが、そのつなぐというところには非常に抵抗があるんですね。県のほうと話が見つからないというようなことらしいんです。「目録はちゃんと出しているんだから、ホームページの画面上で出したって別段どうということはないんじゃない」と言ったんですけど、上層部の意思があって、活字で出すのはいいけれども電子的に情報を出すのは駄目ということのようです。

勝村 大学でもそうですね。東北大学は駄目ですね。そういうふうに決めてしまったようで、なぜでしょうね。

小池 でも、逆に広島大学ではこの間、僕が一応、代表になっているんですが、図書館のほうで書籍の森戸文庫があるんですけど、特に社会主義関係のものはもう冊子目録ができているんですが、それ以外の戦後の森戸さんが持っていた雑多な本があるんですね。これは森戸さんが辞めるときにそのまま置いていった本なんですけど、それなんかを整理して、公開するにあたってはインターネットで公開するというを前提に 600 万の整理費用をもらったんです。ところが僕には一銭もこないで、それで 2000 コマのインターネットで画像を流すと。2000 コマは結構な量ですから、そしたら本の表紙を並べてもしようがないということになって、文章を出し

てくれと。出すのはいいけど全部こちらがやるじゃないかということになって、それで、たいへんだよねという話をしている、実際にマイクロしないところの1の項目の社会党関係ですね。教育刷新委員会だとか、教育使節団関係のものを出そうかなというふうには考えているんですけど、それも400ぐらいの画像処理では綺麗に出ないんじゃないかと思うんです。ですから、いまもめているところなんです。あと何を出すかでね。だから、そういう形でやると大学機関でも予算は科研費なんかでもらえるんですよ。ですから、だんだんそういうふうになっていくんじゃないでしょうか。

梶田 画像ではなくて目録だったら図書は結構やっていますよね。目録で検索できるのが。

伊藤 オーパックはありますが、それはオーパックでも入りにくいんですよ。たとえば、東大のあれなんかは非常に入りにくいじゃないですか。

小池 東大のは部外には公開してないでしょう。

伊藤 あれは許可を取らないと入れないし、検索の仕方が非常に面倒なんです。

小池 国立国会図書館もやってませんからね。

梶田 あれはどうなんですか、何か利権が絡んでいるような……

小池 いや、国立国会図書館に行ったときに広報担当の人と話したんですけど、戦後の著作権の問題等々が含まれていてなかなか難しいということでした。戦前部分に関してはできるけれども、戦後部分では1つずつ確認を取っていく手間がかかるから、部内でやる分にはいいけれども、部外でやると面倒臭いというようなことでした。

梶田 国会図書館の中では、昔からニフティーのオンラインで1分270円というお金を取って検索できてたわけですよ。

小池 だったらできないことはないでしょうね。利権のことでしょうね。

伊藤 それは図書館にしてもアーカイブスにしても、なるべく公開しないようにというのが基本的な理念ですから。アメリカや何かのアーカイブスに行って「こういうことを調べたいんですが」と言うと、「目録のここからここまでを見なさい」とか言って、それでもう少し言うと、「じゃあ、私のほうで選んで持ってきてあげます」と言うから、「どれぐらい持ってくるのかな？」と思ったら、こんなでかい車でいっぱい持ってくるからね(笑)。それで見ると、サインをした正式の文書やなんかが出てくる。やっぱり向こうも紙の悪い時期のものだから、見ているとポロポロ落ちるという。プラングには僕も随分昔に行きましたけれども、コツコツ…コツコツと整理をしてカードを作っていたと思いますが、一部見せてもらいましたけれども、あれは戦後のすぐの時期だから仙花紙みたいな紙が多いでしょう。あれはいちばん危ないと思いましたね。

上山 先生なんかが行かれたあとに特に横浜が行っていると思うんです。それでもって相当のものを写真で撮ってまして、これは使えるらしいともっと上のほうが考えはじめて、だったら全部マイクロにしようという形で強く押したのが村上さんだったんですね。それに国会がジョイントしたと。

小池 プランゲは早稲田に全部入るんですか。

上山 こないですよ。

小池 マイクロは。

上山 マイクロはもう国会に入ってます。現在は新聞をやっているのでは。それで、プランゲの面白いものもいくつか持ってきて、こちら側でやるということになります。

小池 最近、早稲田がインターネットに何か出しましたね。早稲田の図書館だと思いますけど、何がいま整理中ですみたいなのがインターネットで出てくるんです。

伊藤 ミヤジマ文書はちょっと紹介されてましたけど。

小池 あれは1枚紙しかないんですけど出てましたね。何々がいま整理中だとか。ただ、目録は出てきません。何が所蔵されているかというのは出てきましたね。

上山 早稲田はたくさん持っているんでしょう。

小池 早稲田はいいものを持っていますよ。

伊藤 早稲田の社研なんかも随分いろいろ持っているんです。だけど、非常に史料の所蔵が属人的らしいんですね（笑）。

梶田 社研の目録を持ってきて、コピーするように渡しておきましたけれども。

伊藤 早稲田のですか。

梶田 ええ。

伊藤 まだ全然、整理どころか箱に入ったままのものがたくさん積んであるという。

梶田 確か目録は大した量ではなかったと思います。

伊藤 だから、前にニシオリントロウ君があそこの手伝いをしていて、それで石橋湛山の文書をあそこが結構持っていて、彼はあそこから追い出されたんで、ついでにこれは何とかしようというので国会図書館に持ち込んで、それで国会図書館が最終的には買ったのか寄贈だったのか……ということで決着がついて、晴れて公開になったわけです。それで彼に聞くと、「絶対言いたくないけど、たくさんあります」って（笑）。

梶田 社研は違う名称になったんですね。アジア太平洋センターとか。

小池 アジア太平洋研究所の研究科ができましたでしょう。あれの付属か何かじゃないですか。

梶田 いや、社研自体があれになったんじゃないの。

小池 いや、一応あれは研究科ですから、大学院なんですよ。後藤さんとか、小林

さんとか。

梶田 昔、伊藤ゼミに顔を出していた、アメリカに留学していた何とかっていうのが助手で入っているんですね。

小池 アサノトヨミでしょう。

梶田 その助手で今年の4月からいるんです。

伊藤 アジア太平洋センターって彼が言っていたのはそれなのか。

小池 はい。僕は一応行ったことがありますけど、雑居ビルなんです。

梶田 あれは早稲田で作ったオフィスビルなんでしょう。

小池 早稲田大学が作った貸しビルで、その一角にあるんです。あそこは社研の関係で行くと後藤さんなんか東南アジア関係とか山のように持ってますし、史料を探し出せば結構あるんだと思いますよ。

それから、この間の満鉄関係の史料ですが、柏で今度出すんですけど、遼寧省档案馆と非常に関係があるから、小林英雄さんか何かの関係で満鉄の史料とかをマイクロ化して出すというのがありますよ。

伊藤 この研究会ではこれからもいろんな人の聞き取りをやっていきますので、ご案内を差し上げますから、お気が向いたときにお出掛けください。

それから、この研究会のホームページの裏ページがありまして、いろんな情報がありますので、それもお教えします。もしインターネットをお使いでしたらアクセスしてみてください。それで、きょうのは速記録をお送りしますので、手を入れていただければと思います。いままでやった研究会も全部速記がありまして、手を入れたものが全部ホームページに入っておりますが、それはパスワードがないと入れないシステムになっております。

では、次回のことを決めたいと思うんですが、いろいろ史料に関心を持っている人で話を伺えそうな方は。梶田君、お話になりませんか。

梶田 私より西川さんのほうがよく知っているんじゃないでしょうか。

伊藤 あと地方でどうですか。たとえば、長野県とか。あそこはいろいろ熱心にやっているところでしょう。有泉さんにでもお話を聞きますか。

小池 山梨なら有泉さんでしょうね。

伊藤 長野だったらどなたですか。

小池 長野は結構、地方割拠性が高いんですよ。上田のほうと長野のほうではやってる組織が違うから、長野全体ということで把握できる人はいないんじゃないですかね。

伊藤 山梨県立文書館とか、そういうところの人で話をしてくれそうな人はいないですか。

小池 若い人ではいることはいますね。ゲイリ地方史研究会ってありますね。あそこ

は地方史研究の盛んなところなんです。僕が知っているのは、31, 2ぐらいですかね。

伊藤 若い人でも別に構わないでしょう。ちょっと話してもらえませんか。

小池 はい。

伊藤 この前、開港資料館も吉良さんのところに行っていていろいろ話を聞いたんだけど、とにかく目まぐるしくいろいろご説明がありまして、あとで記録を作ろうとしても前のことはすぐ忘れて、季武と2人でどうやってまとめるんだって、まとまりが見つからないんですよ（笑）。

伊藤(光) この間、佐藤さんに話しておいたんですよ。

伊藤 どうでした。

伊藤(光) 良かったんですけど、あれから話がなくなっちゃったから、それで「もう、あれいいのね」と言われたから、「もういい」って（笑）。

伊藤 ノウマルさんは何の話をしてくれるの。

伊藤(光) 史料は強いですよ。大学史の主ですからね。

伊藤 じゃあ、ノウマルさんに頼もう。

小池 あと僕が頼めるのは、LCとかだったら植民地関係をやっている井村哲郎さん。目録も作ってますから。

伊藤 まず身近なところでいきましょう。じゃあ、ノウマルさんに連絡入れてくださいますか。それで話が大体できたら僕に教えてください。そしたら僕から頼みますから。

伊藤(光) 分かりました。ノウマルさんは今度、大学史から変わって、あそこに資料センターみたいなのをやるんですが、いまその準備屋をやっています。いろいろなものをよく見てますから史料的には強いですよ。

小池 早稲田は本当に何をやるか分かりませんから。

伊藤 守秘義務だなんて言われて、あんまり喋ってくれないかもしれないけど。

小池 私立であれだけ持っているのは、早稲田と慶応ぐらいじゃないですか。

伊藤 でも、国学院だって持っているんだから。

上山 何かあるようですね。

伊藤 きょうは国学院の話が全然出なかったから、これは守秘義務なのかなと（笑）。

上山 私なんかもやっぱり、外様ということもないですけどね。

伊藤 やっぱりそんな感じがしますか。

上山 ええ。

伊藤 あそこだったら誰がいいですか。

上山 ご退職されましたからね。でも、法学部系統の人が知ってますかね。

伊藤 じゃあ、柴田さんに頼めばいいんだな。

小池 柴田さんがいちばん詳しいでしょうね。

伊藤 柴田さんそのもので頼もう。

上山 彼はよく知ってますね。

伊藤 では、次回はノウマルさんをお願いするということで、よろしくお願ひします。(第 11 回終了)